第２編

50周年に寄せてお祝いの言葉

ぶどう

1.大学関係者より

患者に寄り添い科学する看護

学校法人東京医科大学 前理事長
田中 慶司

東京医科大学看護学校の創立 50 周年を記念し、心からお祝いを申し上げます。半世紀にわたる歴史の中で、東京医大にとってなくてはならない仕事を分担していただきました学生、卒業生、教職員の皆様に改めてお礼を申し上げます。

医学は実践の学問で、特に、看護の世界で起きる物事は、いわゆる科学的証明が難しいことが多いのではないでしょうか。

フローレンス・ナイチンゲールはイギリスの看護師として有名ですが、クリミア戦争（1853～56 年）での負傷兵たちへの献身的看護や統計に基づく医療衛生改革で功績をあげました。銃で死ぬより、怪我やその処置の問題で亡くなる方が多かった状況を冷静な観察により改善しました。また、ゼンメルヴァイスは、1855 年にハンガリーのペシュト大学の教授に任じられた医師ですが、その前に勤務していたウィーンの病院で、同じ病棟で助産婦が行う分娩と医師の行う分娩では産褥熱の発生率が 10 倍違うことに疑問を持ち、消毒の問題提起をしました。当時の学界では受け入れられはしませんでしたが、手洗いを奨励して、結果として多くの産婦さんの命を救いました。

これらは 1883 年にロベルト･コッホがコレラ菌を発見する時代の 30 年も前の事でした。未知の世界の中で、患者を救う目的で、実践する科学として役に立っている例は看護の世界に多いと思います。今、エビデンスが求められる時代ではありますが、すべての経過がきちんと証明されなくとも問題はかなり解決してしまうものも少なくありませんし､過去、その積み重ねの中で医学、看護学は進んできました。

東京医科大学看護専門学校は、長年にわたり紀要を発行しています。患者に寄り添い、きちんと応える努力をする姿勢のなかで、苦しみや悩みにただ共感するだけでなく、具体的に救い、励ましとなる看護の科学を模索する歴史を重ねてきました。

50 年にわたる積み重ねに敬意を表します。

創立 50 周年にあたって
－東京医科大学看護専門学校の未来－

東京医科大学医学部 看護学科長
岡谷 恵子

創立 50 周年、おめでとうございます。50 年というとまさに半世紀です。日本の看護の発展と並行して、激動の時代を駆け抜け、東京医科大学病院の看護の質の向上に大いに貢献されてきた関係者の方々に心より敬意を表します。

貴校は、准看護婦学校として 1957 年 4 月に開設されました。この頃は、1958 年に基準看護制度が実施され、全国で看護師不足が深刻でした。1960 年からは二八体制を求めて全国に病院ストライキが起こりました。そんな時に、貴校が准看護師の養成を始めたのは、まさに看護師不足解消を狙ってのことだったのでしょう。しかし、7 年後の 1964 年には現在の看護婦学校が開設され、翌年准看護婦学校は通算 228 名の卒業生を輩出して閉校となりました。大学附属病院を背景にした看護人材養成においては、准看護師から看護師へと養成を変えるのは当然のことであったと思います。さらに、1970 年から 1976 年 3 月までの 6 年間は 2 年制の進学課程を併設し、1974 年から 1986 年までは 3 年制の夜間進学課程を併設して、准看護婦学校の卒業生に看護師資格取得のチャンスを提供しています。さらに興味深いのは、1976 年に学校教育法に専修学校の規定を加える法律が施行され、設置基準を満たした学校が専修学校に移行できるようになったことから、東京医科大学附属高等看護学校も、専門課程を置く学校教育法に位置づけられる専修学校として速やかに改称の手続きを行ったことです。この改称によって、その後卒業生には「医療専門課程専門士」の称号が与えられるようになり、大学編入や専攻科への進学等の道が開かれるようになりました。

このように多くの先生方が、卒業生のキャリア支援、看護学の独立性や看護の質の向上を目指し、常に教育環境を整備し、教育内容を高める努力を続けてこられたからこそ看護学科の開設が実現したのではないでしょうか。「看護教育」から「看護学教育」へ、今まさに看護界は人材育成のあり方が問われています。東京医科大学医学部看護学科は、貴校の良き伝統と託された夢を引き継ぎ、次の半世紀に向かって更なる飛躍を遂げていくつもりです。貴校は閉校となりますが、その精神は本学科に流れて、学生や教員を通して未来へと繋がっていきます。

関係者の皆様の、ご健勝とますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

2.病院関係者より

東京医科大学 常務理事
東京医科大学病院 病院長
坪井 良治

東京医科大学看護専門学校の創立50周年を心からお祝い申し上げます。また同時に、今年入学した50期生が最後の年の学生となり、あらたに設立された医学部看護学科に発展的に継承されることに安堵致します。この「50周年誌」が看護専門学校の50年の歴史を正確に記録し、将来への礎となることを願ってやみません。

東京医学専門学校として始まった東京医科大学は2016年に創立100周年を迎えます。1946年に医科大学に昇格してからもすでに67年が経過しています。当時、附属の看護学校の設立は、病院に看護婦を安定して供給するために喫緊の課題であったと思われます。看護師の養成は、准看護婦学校から高等看護学校、看護専門学校を経て、これから医学部看護学科へと形を変えますが、常に時代の影響を受けながら、優秀な人材を輩出しようとしていることに変わりはありません。50年間に卒業した優秀な人材は東京医科大学病院をはじめ多くの病院で活躍しているところであり、この伝統がさらに看護学科として受け継がれ、引き続き当病院の看護の屋台骨を支えてくれることを期待しています。

今後は看護学がさらに外に開かれたものであり、国内外を問わず、人的交流が盛んに行われることを願っています。

坪井先生による看護専門学校3年生(48回生)への講義
(平成25年)

看護部長からのメッセージ

東京医科大学理事
東京医科大学病院 副病院長 看護部長
中野 八重美(進学科第１回生)

看護専門学校創設 50 周年おめでとうございます。
看護専門学校教職員の皆様をはじめ関係者の皆様に心よりお祝いを申し上げます。

看護専門学校はこれまでに 3600 人余の優秀な看護師を輩出してきました。その、卒業生の多くは母校である東京医科大学病院に就職し、質の高い看護を提供し医療現場を支えてきました。現在も、大学病院で働いている看護師の約半数は本校看護学校卒業生であります。当院の看護師は内・外で「優しくて働き者」の評判があります。看護師は、知識・技術も大事ですが、何よりも人に対する“優しさ”が大切です。優しいということはコミュニケーションがしっかりとれており、患者と心が通じていることの証明ですので何よりも嬉しい評価です。これもひとえに、当校の看護専門学校教職員の皆様の丁寧で行き届いた質の高い教育の賜物と思います。

さて、看護専門学校は 2016 年 3 月に閉校が決まっております。その後の東京医科大学の看護の歴史は、2013 年 4 月に開校した東京医科大学医学部看護学科（4 年生看護大学）の卒業生に引き継がれることになります。4 年制看護大学の開設は、東京医科大学看護学校卒業生全ＯＢの長年の念願が叶ったものであります。看護学科の教職員や学生の皆様には、この看護専門学校 50 年の歴史の重みとＯＢの想いを大切にして頂きたいと願っております。学ぶ環境や年月は異なったとしても、東京医科大学卒業の看護師は同じ仲間であり、その歴史と伝統は確実に受け継がれることと信じております。また、日本全国でご活躍の卒業生の皆様には、看護専門学校卒業生も看護学科卒業生も同じ同窓生として、末永く温かく見守って頂きたく存じます。

東京医科大学及び病院関係者の皆様には、今後とも東京医科大学病院の医療の質を支える看護師の育成にさらに一層のご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

同窓生の皆様の今後のご健勝と増々のご活躍を祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

第 16 回国際看護婦(ICN)大会
右端が看護学生の中野部長

教育のバトンタッチ

前東京医科大学理事
東京医科大学八王子医療センター 副病院長 看護部長
小野寺 三喜子(別科第 2 回生)

2013 年 4 月東京医科大学に看護学科が設置され、その大きな変化を印象づける場面が入学式にありました。それは医学科と看護学科との合同入学式にて医学科代表者と看護学科代表者がともに一つの誓いの言葉を読むというものです。医師と看護師は車の両輪といわれながらも時にむなしさを感じていたのは私だけでしょうか。それがここまできたという感慨深いものでした。医学部の中に看護学科を開設した背景はここにあり、医学と看護学を融合した教育をねらいとした看護学科の誕生です。

それから数日後の看護専門学校の入学式において山科学校長は「50 周年を迎える伝統ある専門学校としてはその幕を閉じますが、看護教育の充実飛躍の為の発展的方策なのです」と式辞を述べられています。その言葉はとても潔く爽やかなものでした。

さて、私も本年 4 月に東京医大勤続 40 年を迎えました。看護婦としての 40 年前のスタート時と今では医療が大きく変わり多くの変革がありました。しかし、「看護は生きることへの手助け」という原点は変わっていません。

私が大学病院にこだわり勤務し続けた理由が二つあります。

一つは、「教育は将来の財産」という恩師の言葉でした。そしてもう一つは、いまの場所で変革ができなければどこに行っても変革はできないという私の信念でした。看護管理者となり、理事となり、将来の財産をつくることにどのくらい貢献できたのか評価は後に譲ることにします。自分がおかれた場所で物事を変革し、成功した時の喜びは何とも言えないものがありました。今でも患者さんやスタッフの喜ぶ顔が私のエネルギー源となっています。その変革に終わりはないのですが、今になって思うに他学での経験も必要であったかなと考えます。

看学入試の合格発表日、相原氏から書類を受け取る小野寺看護部長
(昭和 46 年)

私達が看護学生時代遊んだ新宿中央公園の桜は、今や大木になり毎年見事な花をつけています。看護学科という樹を植えた東京医大はこれから新たな歴史が始まります。卒業生の皆様にはご支援とご協力をお願い申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

創立５０周年に寄せて

前東京医科大学病院 看護部長
阿部 満子(第６回生)

東京医科大学看護専門学校の創立５０周年、心よりお祝い申し上げます。

半世紀を経て、私達が学んだ頃とは医療、看護教育も格段の進歩をしています。振り返ると入学したばかりのことが懐かしく思い出されます。全寮制の学校で、厳しい先輩や物静かで優雅な雰囲気の優しい寮母さんから教わった礼儀作法などが今の自分をつくりあげたことに感謝の念を禁じえません。現在のシステムからは想像もできない環境の中で学び成長できた陰には、東京医科大学附属高等看護学校の先生方の教育にかける熱意と実践力がどれだけ素晴らしかったか、今にしてようやく実感できる次第です。

東京科大学附属高等看護学校は、その前身が准看護婦養成から始まり看護専門学校へと名称変更し、平成２８年には閉校となります。２５年からは看護学科へと移行し教育の質が一段と高まります。

私が臨床で働いてからは、熱意をもって就職してくる新人をいかにして育てるかということが毎年の課題でした。幸いにして東京医科大学病院では臨床スタッフが自校の卒業生のみならず看護師としての後輩を育てるという熱意のある看護師が大半でした。

また東京医科大学看護専門学校は実践能力の高い教員が臨床と連携して、学生の指導に当たり、臨床の指導者とはとても良い関係が取れていたと思います。学生にとっては臨床と学校の良い関係が実習の成果につながります。

これからは専門学校の学生とは違った指導方法も求められると思いますが、双方良い関係を築いて東京医科大学としての誇りを持てる学生を育てていってほしいと念じております。

最後になりますが、３６００人を超える看護専門学校の卒業生の皆様も今まで受けた教育に誇りをもってこれからも活躍されることを願っております。

第６回生戴帽式:前列左から２番目が阿部元看護部長
同窓会館にて（昭和 44 年）

創立 50 周年に寄せて

東京医科大学茨城医療センター 看護部長
吉田 和美

東京医科大学看護専門学校が創立 50 周年を迎えられたこと、皆様とともに謹んでお祝い申し上げます。

「自主自学」の理念のもと、東京医科大学、歴代の学校長先生をはじめ専任教員の皆様、多くの非常勤講師、事務職員など関係者の皆様には、輝かしい発展を遂げられ今日の日を迎えられましたこと心よりお慶び申し上げます。

この 50 年間を振り返ってみますと、課程・カリキュラムの変更、定員の増員など、時代の要請とともに学校の状況もめまぐるしく変革していったことと思います。そのような中で、倫理観に基づく豊か人間形成をめざし、看護の質向上と変化する社会に貢献できる看護師を育成された情熱に敬意を表したいと思います。

看護師教育の現状は、全体的に生活体験が乏しい学生も多く、教育を行う上では教員の時間をかけた丁寧な関わりが必要となっています。また、限られた時間の中で学ぶべき知識が多く、カリキュラムが過密になっています。臨地実習では、在院日数の短縮化により、実習を効果的に行うことに苦慮されたこともあったと思います。日々の教育活動で多忙の中、それぞれの教員の皆様が取り組んだ科目での成果は、多くの論文や、教育実践の報告書として紀要にまとめられ、看護師教育の発展に寄与し、私たちの多くの学びとなりました。また、在籍中、姉妹校である霞ヶ浦看護専門学校への多大なるご支援に、感謝申し上げます。

今後更に、ヒューマンケアの基本的能力、チーム体制を理解し活用する能力、研鑽する能力が求められます。本校の理念を踏まえた教育こそが、これらの能力の修得につながり、これまで培ってきた教育の歴史は、更に発展し受け継がれていくと確信しております。

東京医科大学看護専門学校に感謝いたしますとともに、ますますのご発展と、皆様の益々のご健勝、ご活躍を心より祈念致しましてお祝いの言葉とさせていただきます。

看護師人材センター参事からのメッセージ

東京医科大学看護師人材センター参事
小川　清枝(第８回生)

2006 年度の診療報酬改定で「7 対 1 入院基料」が設定されたことをきっかけに、診療報酬の増額を目的に看護師の増員が激化しました。2007 年 4 月に看護師の人材確保と離職防止への取り組みを行う目的で看護師人材センターが設置されました。

毎年、50,000 人程の看護師が誕生しています。しかし、看護師不足は改善されていません。少子高齢化の進む日本で、看護師の需要はますます増加拡大しています。

看護師採用のために、北は北海道から南は九州・沖縄まで学校訪問と合同就職説明会のために飛び回っています。

東京医科大学看護専門学校も創立 50 周年を迎え、3,500 名以上の同窓生が誕生し、全国で活躍しています。日本の医療を支え、看護の充実と発展のために東京医科大学看護専門学校の卒業生として、誇りと自信を持って仕事にまい進したいと思います。

楽しかった学生時代の思い出と、同期生の友だち。そして、臨床での多くの学び、仲間や上司に恵まれ、現在も頑張っています。

東医祭にて：右から 2 番目(昭和 46 年)

東京医科大学看護専門学校 50 周年を祝して

東京医科大学病院 副看護部長
健診予防医学センター
宮崎　歌代子(第８回生)

東京医科大学看護専門学校創立 50 周年、心よりお慶び申し上げます。この記念すべき節目を、東京医科大学病院副看護部長として一緒にお祝いできることを嬉しく思います。

卒業後 30 余年。振り返りますと熱心にご指導くださった諸先生方、同じ志を抱き青春時代を共に過ごした仲間との 3 年間は、懐かしいの一言では余る思い出です。

現在、東京医科大学病院に勤務する看護職の約半数が卒業生です。東京医科大学は平成 28 年に創立 100 周年を迎え、新病院も完成の予定です。人の生命と生活に向き合える看護実践者の人材育成は言うまでもありませんが、一先輩看護師として、東京医科大学病院の未来の看護を担う看護師たちの成長を心から応援していきたいと思います。

開校後、学校名や学び舎は変わりましたが、卒業生 3600 人余が日本内外を問わず活躍されているのは心強い限りです。母校の看護の教えは卒業生一人ひとりに受け継がれ、これからも臨床や教育の場、地域で生き続けていくでしょう。

最後に、卒業生皆さまの益々のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

看護専門学校５０周年を記念して

東京医科大学病院看護部 副看護部長
宮川 江都子(第 13 回生)

看護専門学校 50 周年、おめでとうございます。

昭和 51 年に入学し、プレハブ校舎、地下の実習室、猫また食堂※1、初めての寮生活など、色々な事柄が走馬灯のように思い出されます。13 回生は、北は青森、南は鹿児島と全国各地から集まっていました。不器用なために「魔の 13 回生」と言われましたが、その都度、皆で悩み考え、話し合い、解決に向け行動した事を記憶しています。不出来な学年でしたが、「国家試験 100%」で卒業できた事は、ご指導いただいた諸先生に報い、有終の美を飾ることができ誇れる事の 1 つです。多感な時期に辛かった学生時代を共にした同期は、私の一生の宝物です。

長きに渡り東京医科大学病院に勤務し、今では、当院で働く多くの仲間を採用する立場になりました。基礎と臨床がタッグを組んで看護学生が多くの成功体験を持てるよう、また、働く看護師がいきいき働き続けられるよう側面からサポートすることを念頭に勤務しています。そして、本学の「自主自学」の精神、東京医科大学病院の看護の心を伝え、繋げていきたいと思います。

最後に、世界、全国津々浦々にいらっしゃる多くの同胞の活躍を祈念します。

東京医科大学病院看護部 副看護部長(教育担当)
髙城 由紀(第 18 回生)

創立 50 周年おめでとうございます。『光陰流水が如し』の諺通り、時の経つ早さを実感致しております。

私事ではありますが、32 年前に“憧れの看護婦(師)”になることを夢見て上京し、東京医科大学の門を潜ったことを昨日のように鮮明に覚えています。私にとって、最高の友との出会いができたのも看護学生時代で、毎日が楽しくまさしく青春でした。臨床実習では学習した理論や根拠を上手くいかせず苦慮した苦い思い出もあります。しかし、その東京医科大学看護専門学時代に得た貴重な経験を大切に、それを誇りに思いながら 30 年間看護に携わってきました。

現在、私は同大学病院の教育副看護部長として仕事をしております。我が国の「超少子高齢化・人口減少」という人口構造の大きな変化と共に病院や看護に求められる役割や期待も大きく変化しています。同時に新人看護師も高校卒業後の単身同年代だった私達の時代とは異なり、個人背景も実に多様化しています。精神的に脆弱な看護師も少なくなく、いかにして早期に職場適応できるよう支援していくかが今の私の大きな職務です。卒業生は勿論の事、当院に就職してくる新採用看護師を大切な仲間として迎え、質の高い看護が提供できる人材育成を目指していきたいと思います。

※1 猫また食堂：昭和 40 年に西新宿の病院敷地内にできたプレハブの職員学生食堂のこと。「猫もまたいで通り過ぎる食堂」という意味でその名がついた。名付け親は不明である。

-懐かしき婦長さん-

平成 23 年度若草会(定年退職された婦長・師長さんの会)

左から浜野(関口)操・高橋(田島)和子・木船みどり・山本和子・
杉浦亮子・阿部満子・佐藤りゑ・青木利津子・八木(柴田)保子元婦長・師長

野中婦長(右側)

千葉婦長

清水婦長

長谷川婦長

森川婦長・看護部長

秋田婦長　青木婦長・看護部長

永井婦長

木船婦長

3.教職員より

これからの看護への展望

第七代学校長　高崎　優

開校 50 周年、誠におめでとうございます。

昭和 32 年開校以来、今日まで自主自学の精神を基本理念とする本校の特色ある教育方針を貫き、多くの優秀な看護師育成に御尽力頂いた歴代の教職員の先生方に深甚の謝意を表し厚く御礼申し上げます。また、本校御卒業の 3,600 余名の同窓の皆様、並びに在校生の皆様に心より御祝いを申し上げます。

御承知の通り、本校も当初は、臨床看護師の養成を目標に開校されました。その後、医療の高度化、家族・家庭の生活様式の変化、少子・高齢社会に伴う社会構造の変化、疾病構造の変化などにより看護の環境にも変化が起こり、看護実践の場はこれまでの医療施設に留まらず地域社会へと拡大し、必然的に、求められる役割も多様化の傾向を呈する状況となりました為、本校もこのような時局に応えるべく、より明確な学習領域を定めた改定カリキュラムに準拠した看護基礎教育が行われるようになり、今日に至っております。看護学校の役割は、人間を全人的に理解させた上で看護の概念理論の体系を学習して専門職としての知識と基本的な技術を習得させる事が主たる教育業務になっており、併せて、患者さんとの信頼関係を構築するためのコミュニケーション能力と責任能力の養成が重要な課題となっております。これらに加え、本校が看護教育上もっとも重要な項目としております事は、教育理念にも明記されております、揺るぎない倫理観の涵養、すなわち、簡潔に申しますと、「正しい行いによって、全ての人の利益が守られるルールを看護活動全般並びに社会道徳の実践体系の基本とする」という規範に沿って主体的に看護の実践に臨む人格的特質の修得であります。元来、看護の実践内容は、生命維持管理（血圧・呼吸管理、水分管理、服薬管理など）といった様な、常に管理的要素を伴った仕事が主体となっておりますために、家族を除けば、援助を求める人に最も近い処に居る立場上、看護の実践に際して、しばしば人間を精神的・身体的に多角的視点から判断する事が求められる場合があり、自分の中に高度で変わる事のない価値観と正しい行動の原理を組み立てておく事は、これからの時代、必要不可欠な能力になると考えられます。更に、これは生涯学習の範疇に属しますが、「看護は実践の科学」とも言われております通り、自主自学の習慣を活かして自己啓発を心掛ける中で、実践に役立つ新たな看護の形態を創意工夫する応用能力も是非培って頂きたい課題と考えております。将来この中から２１世紀の社会が求めるより実効性のある看護が生まれる事を期待しております。

これからの看護師は、社会の中で有用度の高い専門看護職としての独自性のある地位を樹立することが節に望まれております事から、引き続き本校固有の理念に基づいた教育を教職員一丸となって精力的に展開して行く事により、大いなる成果を挙げられる事を念願しております。

東京医科大学看護専門学校学校長を経験して

第八代学校長　友田　燁夫

この度、東京医科大学看護専門学校が開校 50 周年を迎えることを心よりお慶び申し上げます。私は平成 14 年より 6 年間学校長として在任いたしました。教員の皆様との初めての職員会議で皆様が希望する議題として出されたのが、学科(学部)への昇格のことでした。この件については私の前々代の学校長、故・伊吹山千春先生が精力的に調査されたことを伺っていました。しかし、学科設立は大変難しいというご報告があったとのことでした。私も精査しましたが、当時の東京医大の本部としては財政的な事情のため、その設立は大変困難であるという結論に達していたようです。その後、東京医科大学の現理事会の強力な推進により、本年より新たに看護学科が新設され、皆様のこれまでの悲願が成就されましたことは慶賀の至りです。50 年に亘って看護専門学校で培われた素晴らしい伝統がそのまま新しい学科に受け継がれ、伝えられていくことを心より願っております。

在任中に多くの新入生を迎え、また立派な看護師として卒業生達を送り出せたことは学校長としてとてもうれしいことでした。それには看護専門学校の先生方、事務職員の方々、また病院看護部の方々の地道で熱い指導がなければ成り立たなかったことはいうまでもありません。卒業式での卒業生達の嬉々とした御姿は今でも強く脳裏に焼き付いています。看護専門学校での日々の仕事は私の人生にとって大きな出来事であり、かけがえのない経験であったと今更ながら思われます。最後になりますが、東京医科大学看護学科の大いなる発展を心より祈念いたします。

学校長からのメッセージ

第九代学校長　勝村　俊仁

東京医科大学看護専門学校が 2014 年に創立 50 周年を迎えることになり、元校長として大変嬉しく思っております。

本校の前身である東京医科大学病院附属准看護婦学校が 1957 年に開校し、その 7 年後の 1964 年に本校が開設されました。その後、1968 年にカリキュラムが改正されましたが、現在までの間、医療を取り巻く環境はめまぐるしく変化し、看護職にも多くのことが求められるようになりました。わが国の看護教育は高度化する医療に対応できる判断能力、応用力、問題解決能力の獲得を目指し、ゆとりある教育、高齢社会に対応した継続看護、在宅看護、包括医療、臨地実習などがその骨子として改正され、1990 年 4 月より実施されてきました。その後も今日まで、さらに医療を取り巻く環境は変化し、再度、看護教育の改正がなされました。本校でも 1997 年から、また 2009 年 4 月から、改正カリキュラムによる看護教育が開始されました。これまでに多くの先生方が学校長を務められ、私も微力ながら 2008 年より第九代学校長を務めさせていただきました。しかし、2010 年 4 月より医学部副学長への就任のために、2010 年 4 月から山科章主任教授に引き継いでいただきました。わずか 2 年の在任期間でしたが、優れた看護師育成を目的とした看護教育の重要性について認識を新たに致しました。

2 年間の学校長在任中、医学部にはない戴帽式に出席いたしましたが、その厳かで、かつ心温まる雰囲気に感動し、毎回、目頭が熱くなる感動を覚えました。また、本校の謝恩会では、教員、事務職員の方々が積極的に参加しており、医学部の謝恩会では経験したことがなく、最初は大変驚きました。しかし、戸惑いながらも教職員の方々と仮装ダンスに参加した時には、その踊りを見ていた卒業生の歓び様に驚き、乗せられ、本当に楽しい時を過ごすことができたことが懐かしく思い出されます。

東京医科大学医学部は、2013 年度より看護学科が新設され、医学部医学科と医学部看護学科として新たな組織でスタート致しました。これに合わせ、本校では本年が最後の新入生を迎えた年となり、2016 年 3 月に最後の卒業生を送り出すことになりました。これまでに送り出された 3,167 名の同窓の皆様は様々な医療現場で活躍されておられることと思いますが、この 50 余年の歴史を持つ東京医科大学看護専門学校の卒業生であることに誇りを持ち、母校の歴史をいつまでも後世に伝えていただけることを願いお祝いの言葉とさせていただきます。

医学部看護学科への遺産

東京医科大学霞ヶ浦看護専門学校
学校長　齋藤　誠

東京医科大学看護専門学校の設立 50 周年に際し心からお祝い申し上げます。

東京医科大学の沿革は、ホームページによりますと、1916 年、日本医学専門学校（現　日本医科大学）の学生が学校側と対立し、退学したことをきっかけに新校設立運動を開始し、同年、東京医学講習所が設立されました。1918 年には、東京医学専門学校が設立され、1946 年、東京医科大学に昇格し、現在に至っています。

東京医科大学看護専門学校は 1964 年開校で、与謝野光先生が初代学校長に就任され、現在は山科章先生が第十代学校長となり現在に至っており、これまで 3600 余名の卒業生を輩出し、2013 年で設立 50 周年の節目を迎えました。なお東京医科大学看護専門学校に遅れること 11 年、1975 年に東京医科大学霞ヶ浦看護専門学校が開校しています。また、2013 年には医学部看護学科が開設され新入生 89 名が入学し、東京医科大学看護専門学校にとっての最後の入学式が行われたとのことです。

医師が医専時代をへて約 30 年後に医学部医学科に移行したように、看護専門学校から 50 年後に医学部看護学科へと移行しようとしています。1976 年に 6 校から始まった看護系大学は毎年 10－20 校ずつ増え今や 200 校を超えています。平成 23 年度の第 101 回看護師国家試験の合格者（新卒）46928 人中、大卒 12867 人（27.4%）、3 年課程養成所 20126 人(42.9%)。平成 24 年度の第 102 回看護師国家試験の合格者（新卒）48413 人中、大卒 13640 人(28.2%)、3 年課程養成所 21733 人(44.9%)。専門学校が今でも最もメジャーですが、大卒看護師が 3 割になろうとしています。大卒看護師にとって正看に留まる限りほとんど待遇の差はありませんが、将来のキャリアアップ、認定看護師、専門看護師などの資格取得に有利です。特に専門看護師などは大学院修士課程を必要としております。専門学校出の正看が働きながら大学に、あるいは社会人入試を通じて大学院に通えるような制度改革が必要とされています。

本科の卒業生はもちろん、別科・進学科も、さらに阿見の卒業生 1300 余名も、同じ校歌を歌い、建学の精神「自主自学」と、正義・友愛・奉仕の校是のもとに勉学してきた同窓です。彼らの歴史的、精神的遺産は、新設された医学部看護学科に引き継がれることを切に願います。新宿、阿見の卒業生あわせて 4900 余名は東京医大のかけがえのない財産であり、卒業生のスキルアップ、キャリアアップに配慮したものとなって欲しいと思います。

東京医科大学霞ヶ浦看護専門学校校舎

教務主任として過ごした日々―15年間を振りかえって―

前茅ヶ崎看護専門学校学校長
第六代教務主任　黒坂　知子（第3回生）

東京医科大学看護専門学校が50周年を迎えた平成25年4月、私達同窓生が長く待ち望んでいた看護学科が開校した。どちらも悦ばしいできごとであるが、それは同時に、専門学校として最後の入学生を迎える年ともなった。時の流れとはいえ、皮肉な運命である。同窓生として、長く専門学校に奉職し、後輩の教育に関わり、過去に一時期看護学科の開設へも関わった者としては、悲喜こもごもというのが今の正直な気持ちである。

教務主任として、31 年余りの教員生活の半数を過ごしたが、このように長期間母校において後輩の教育をできたことは、私の人生における輝かしい歴史であり、宝である。

学生と共に笑ったり泣いたりして過ごした講義や臨地実習、年2回の教員との宿泊研修、実習施設の開拓や調整のために歩いた日々など、苦しかったことよりも楽しかったことが走馬灯のようによみがえってくる。

しかし、今思い出しても、釈然とせず苦い思い出となっている一つのできごとがある。
それは、故伊吹山学校長時代に、学校長と共に看護大学化の準備をしながら、最後の決定で時期尚早と挫折したことである。元東京医科大学病院の杉浦看護部長もこの時のメンバーであった。看護大学化に向けては、2度目の挑戦であった。1度目の挑戦は故岩根学校長時代であり、岩根先生が事故でお亡くなりになった後の事である。岩根先生の遺志を受け継ぎ、伊吹山先生は精魂を傾け、私達を励ましながら精力的に準備を進められた。しかし、またしても、最後の土壇場でこの事案が却下された。その時の、苦渋に満ちた伊吹山先生の姿は、苦い思い出として今でも私の脳裏に焼きついている。

同窓生の皆様、50 周年を迎えた春に機が熟し看護学科は開校したが、その歴史の裏にはこのようなドラマがあったということを覚えておいてほしい。

専門学校の歴史は残念ながら終わろうとしているが、この学校で学び、その後東京医科大学病院を始め日本の看護の一端を担ってきたという誇りを忘れないでほしい。

イラスト:黒坂悦子

多くの功績を残された50周年を祝って

東京医科大学霞ヶ浦看護専門学校
教務主任　廣畠　千鶴子

東京医科大学看護専門学校が創立50周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

東京医科大学看護専門学校は、学校法人東京医科大学と東京医科大学病院と共に日本の政治・経済の中心部であります新宿の地で、わが国の看護教育の歩みの先取りをしながら、より斬新な看護教育に取り組まれ、優れた多くの看護師を世に送り出されました。卒業生は日本全国の病院で豊かな人間性と専門的知識・技術を駆使され、最先端の医療をはじめとして幅広い分野で活躍され、社会から高い評価をお受けになられていることはご存知の通りでございます。世の中の流れや変化の中でも、着実な看護教育の歩みを続けられ多くの功績を残されました。学校長先生をはじめとする諸先生方、関係各位の方々のご尽力に対し深甚なる敬意を表する次第でございます。

東京医科大学看護専門学校と姉妹校であります霞ヶ浦看護専門学校はこの伝統ある東京医科大学看護専門学校を目標とし、その質の高い教育技術を参考に進んでまいりました。看護教育の質的向上はいつの時代にも大切なことではありますが、超高齢社会を目前にして社会からの期待も益々高まっております。どうぞこれからも変わらぬご指導と支援をいただけましたら幸いかと思います。

創立50周年おめでとうございました。

看護教育 50 年の歩みをお祝い申し上げます

元専任教員 原口(太田) 敦子

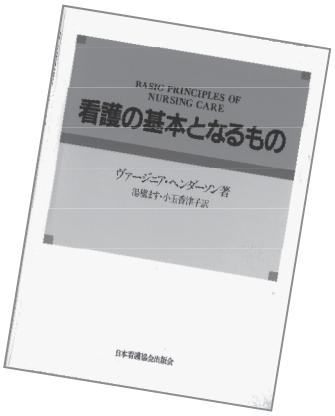
東京医科大学看護専門学校の前身である東京医科大学附属高等看護学校スタート時の教育とその思い出を、という原稿依頼を受けましたが、私は、はたと考えてしまいました。50 年前のことは今、何を意味するのだろうと。時代背景や現場の医療環境、生活の仕方や人の価値観さえ大きく変わっているのですから。一回生との年齢差が 5 ～ 6 歳であった私も後期高齢者となり、終活のため、看護教育に関する資料はもとより、「思い出」さえみごとに断捨離ずみなのです。

1964 年、東医では准看教育最後の年で、同時に高看教育がスタートしています。東海道新幹線開通、東京オリンピック開催、沖縄はまだ日本に復帰していません。世の中は上昇ムードでエネルギーが満ちあふれていました。病院隣接の別棟建物に看護学校の教務室、教室、寮等がありました。現在、都庁をはじめ高層ビルが建ち並ぶ辺りは当時、淀橋浄水場でしたから、風に小さく揺れ動く蒼い水面が、時折仕事の緊張を癒してくれる一視野でもありました。教務室の中は、学生への配布資料、試験用紙全てが謄写版印刷でしたから、職員の誰かが鉄筆を握っているガリガリ音や、ローラーを押している姿がありました。

御母堂 与謝野晶子のお顔そのままの与謝野光校長先生は、やさしい方でした。学生一人一人に対しても、看護教育に対してもその姿勢で、他者を思いやる先生の内面のやさしさを仕事の傍らで私は感じていました。

それは、看護教育の将来を見据え、現状をどうするか、どうにかしなければ等々、校長先生、教務主任、その他の教員との間で連日、熱い熱い思いや意見が交わされる日々でしたから。一回生の三年次に、聖路加国際病院での実習はそういう中で、いろいろな方々のご配慮もあり、実現しました。先輩のいない学生にプロフェッショナルな看護行為の実態を体験するという目的で、聖路加の看護業務体制の中での実習です。交代で一人一週間、朝 5 時に寮を出て、地下鉄で通いました。学生は複雑な気持ちもあったと思いますが、全員が無我夢中でした。同行する私も梅雨時であるにもかかわらず冷汗の二週間でした。

毎年、入学してほどなく、時々結露もあった地下実習室で、先ずは基礎看護技術を習得し、卒業前には、講師の方々を前に症例研究を披露。ブルーのストライプ模様の実習ユニホームに包まれた青春真ただ中、戴帽式の時、決意を新たにしながらも、常々生ずる学生の戸惑いや不安の表情は、今も私の中に残っています。



当時、「看護の基本となるもの」という訳本小冊子が出ていましたが、教育制度や社会がどう変わろうとも、人間の本質は変わりません。病める人にさし出す・・・・を支える・・・・に寄り添う　ために看護の基本となるもの、は「人間をみる」ことでしょうか。

看護教育の充実と発展をお祈り致します。

東京医科大学看護専門学校の教育とその思い出

元専任教員　吉岡(小林) 敏子

卒業生の皆様こんにちは！２０歳代から約２５年間、青春時代も子育て時代も子離れ時代も東京医大と共にありました。当時はカリキュラム変更直後で、長期間続いた各科疾患看護の時代が終わり、基礎・成人・母性・小児・看護学の始まりのころでした。とはいえ専門学校ですから実習は基礎・成人は勿論、母性・小児も人が居なければ出向かなければなりませんでした。実習場では当時の指導者は学生を熱心に指導してくださり、キツイ言葉も投げかけられました。私も今だったらきちんと対応できるだろうと思いますが、当時は何一つ言い返せず師長さんに頭を下げるばかりでした。

最近クラス会で皆様の成長した姿に出会い、若い私には、苦労も多かったけれど、教員で良かったとしみじみ思います。卒業生の昔話を聞くと良く知っていたつもりでも見えていないことが沢山あったという様々な秘話を聞かされ、笑いに花が咲きます。全寮制だったころ、寮母さんの高尾さんがきめ細やかに躾をしてくださり、お風呂の入り方までビジュアルに教えて下さったのを今でも思い出します。私も国家試験に合格して欲しいと失礼な事も言ったように思います。みんな一つ一つ貴重な想い出として残っています。

今年、私の母校の大學に看護学部ができ、創立者より学生へ三指針を頂きましたのでご紹介します。

一、生命の尊厳を探求する生涯学びの看護
一、生きる力を引き出す励ましの心光る看護
一、共に勝利の人生を開く智慧と慈悲の看護

皆様は東医看学の卒業生として自信を持ち、人の中で育ち、知性・品性豊かな人として活躍されるよう期待しています。私も生涯、努力して参りたいと思っています。

左から福岡・後藤(仁義)・杉浦・与謝野・吉岡(小林)先生
第 6 回生戴帽式(昭和 44 年)

元専任教員からのメッセージ

元専任教員
元進学科設立準備室
目白大学看護学部看護学科・大学院看護学研究科 教授
河津 芳子（第2回生）

先日、京王プラザホテルに行く機会があり、建設中のホテルが階を増して段々高くなっていくのを眺めながら通勤していたことを思い出して、感慨深いものがありました。あれからもう40年余になります。その後のほとんどの期間を、看護教員として過ごしてきました。看護教員のスタートが別科専任教員であったことは、私の人生にとって意味深いものだったと思っています。

私とあまり年齢差がなく臨床経験では先輩もいる学生に交じって、教師として活動するのは苦しい面がありました。周囲の方々に助けられ、何とか格好をつけていましたが、どうにもこうにも動きが取れないようになってしまった時、本来の自分で学生に向かえばよいと思えて、フッと肩の力が抜けた感じがしたのです。その時から、不思議と素直に学生と対することができるようになったように思います。

当時のことをふりかえると、お祝いの饅頭をケーキに変えて失敗したこと、国家試験の勉強に精を出すように尻を叩こうとして、「国試に落ちて恥ずかしいのは、私。ちゃんと受かってみせます」と逆に叱られたこと、欠席が続く学生を追って山手線を回ったことなどなど、次々に湧いてくるいろいろな思い出があります。

実習指導では、小児科、耳鼻科、外科等々ほとんどの実習に出ました。講義のない時間は病棟に出ているため、準備は帰宅してからで、全く時間の余裕がないと思いました。でも、この体験から、ウィーデンバックの学生指導を基本にして、実習には必ず出て、講義の内容と実際の事象とを結び付けるように、以後も心掛けることができました。昨今、教員の看護実践能力が問題にされていますが、体験の重要性を自覚させてくれた当時のことが強く思い出されます。

今年、私たちの入学当時から言われていた大学化が叶いました。50年の歴史の上に新しさが積み重ねられることを祈ります。

元専任教員からのメッセージ

元専任教員 藤腹 明子

この度は学校創立 50 周年、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

私が東京医科大学看護専門学校で専任教員として仕事をさせていただきましたのは、昭和 47 年 1 月から 50 年 12 月までの 4 年間でした。この学校で、看護教員としての第一歩を踏み出させていただきました。当時、新前の私は他の先生方にはご心配をおかけしたり、看護学生の皆さんにも充分なかかわりができなかったのではないかと反省をいたしております。しかし、若かったがゆえの一生懸命さも多少はあったのか、楽しい思い出も多く、今も、当時を懐かしく思い起こすことができます。在職中、担任をさせていただいた学生さんの中には、今もお年賀状を届けてくださる方があり、いつもうれしく有難く拝見しております。

東京医科大学看護専門学校を退職以来、ずっと看護教員の仕事を続けることが出来ましたのも、当時の専門学校での体験や学びがあったからだと思っております。今は、現役を退いておりますが、非常勤として、看護系の大学で「ターミナルケア論」や「仏教看護論」という科目の講義を担当しております。新前の専任教員だった当時の頃の学生気質と、現代のそれとはかなり違いがあるように感じられます。時々授業中に面食らうこともありますが、「看護を受けるかたからご指名のかかるような看護者であってほしい」、「もしも自分が看護を受ける立場にあったなら、どのような看護者からどのような看護をしてほしいのかをいつも念頭に入れて看護を考えてほしい」、「外国の看護理論をそのまま現場に取り込む前に、よく吟味してほしいし、また、より日本的な看護とはどのような看護なのかについても考えてほしい」ということを、看護学生の皆さんに伝えています。微力ながら、今も看護に、看護教育にかかわらせていただけることを有難く思っております。

東京医科大学看護専門学校が 50 周年を迎えられましたことは、専任教員として仕事をさせていただきました者にとりましても大きな喜びであり、心よりお祝い申し上げますとともに学校の益々のご発展を祈念いたします。

左から吉岡(小林)・亀川・藤腹・杉浦先生

東京医科大学看護専門学校 50 周年への思い

元専任教員 平田 昭子

東京医科大学看護専門学校 50 周年おめでとうございます。

50 年という長い歴史を刻むには、関係者の皆様方の並々ならぬご努力があって今日の素晴らしい学校になったと思います。他の学校での経験をして思うことは、東京医科大学看護専門学校が誇れるということ、自主自学の理念に基づき、先生方の教育への熱意、謙虚な姿勢から多くの学びを得て、学生は逞しく、頼もしく育っているという実感です。

私は、昭和 49 年に 2 年課程の看護学校に専任教員としてお世話になり、2 年後には閉校となり退職。再び縁あって進学科へ。いずれも最終クラスを担任。その後、看護科へ。

そして、東京医科大学の職員として八王子市立看護専門学校への出向で 3 年課程の立ち上げに関わり、通算 22 年間程東京医科大学でご指導頂きました。50 年の歩みの一時期、ささやかながら関与できたことに深く感謝申し上げます。当時の様々な思いが去来しますが印象に残っている二,三の出来事を述べてみたいと思います。

先日、定年後フリーの私に、非常勤で講義、実習指導の依頼があり、久々に学校を訪ねました。数年前に同じ教室で立っていた自分の思いが蘇り、感慨深い思いに浸っていると、「私のお母さんは先生が担任だった」という学生の声に、歴史を感じ、当時の教室風景が一層鮮明な映像として浮かびました。その教室で学生と様々な事で対峙していた事、看護研究発表会での学生の堂々とした姿やロサンゼルスの UCLA 訪問やサイパンへの修学旅行等、海外へ出かけていた時代、現地での対応等に戸惑った事、謝恩会で校長先生はじめ教員一同で踊りや寸劇をし、賑やかな時を過ごした事等、学生と一体になった取り組みが懐かしく思い出されます。教員間では、合宿研修で夜を徹してカリキュラムの見直しを行い、その源流が今でも続いている事等、他では経験できなかった貴重な体験でした。何より当時担任していた学生が、現在、母校の教員として活躍している姿に頼もしく思うと同時に、同僚として働いていた先生方が、今日迄継続して活躍されていることは心強い限りです。教員室を訪れても知っている先生方に出会うことで、故郷にかえった思いがします。私にとって、東京医科大学看護専門学校でご指導頂いたことは、原点であり誇れる場であったことです。全国あるいは海外で働いていらっしゃる卒業生の皆様が誇りを持って益々充実した日々を送られますように願っています。多くの皆様方のご指導に深く感謝申し上げます。

24 回生青年の家合宿研修での時教員の出し物「かぐや姫」
かぐや姫役が平田先生は右から 5 番目
（昭和 62 年）

元専任教員からのメッセージ

元専任教員
東京医科大学医学部看護学科 副学科長 教授
竹内(佐藤) 千恵子(第 3 回生)

先日、久しぶりに東京医科大学病院を訪れましたが、周囲の様子がすっかり変わってしまい、大きな戸惑いを覚えました。それもそのはず、私が 11 年過ごした東京医大を巣立って 35 年余りが過ぎていました。東京医大での後半の約 3 年間を看護学校で教員として過ごしました。ちょうど本科の 12 回生、13 回生や別科の皆様と多くの時間を過ごした記憶があります。臨床にいた時から学生とかかわることが大好きであった私は、看護学校へ張り切って異動したのを覚えています。教員として初めての教育現場で、手探りで学生とかかわっていました。今から考えると、張り切りすぎて暴走気味であったと、当時を思い出し内心ひやひやしています。

そのような私も、世間の荒波にもまれて多少丸くなって、平成 25 年 4 月東京医科大学に医学部看護学科の教員として戻ってきました。在学時代から大学化の話は噂になっておりました。東京医科大学を離れてからも、当時の先生方が大学化へ努力をされていると聞きましたが実現しませんでした。それが、今年 4 月医学部看護学科として設置されたことは、卒業生として、元教員として大きな喜びです。さらに、縁あって母校に戻りその出発に関わる機会を得ましたこと、心から感謝しております。

これからは、50 周年の歴史の重みを引き受けながら、次の 50 年を目指し、さらなる看護の発展に寄与できる人材の育成に微力ながら努力を重ねてまいりたいと思います。

後列左から 事務の方 竹内・足立先生、事務の方二人、岡田先生
渡部(外久保)・福岡・吉岡(小林)・米田先生とそのお子さん

元専任教員からのメッセージ

元専任教員
宮城大学看護学部・看護学研究科副研究科長兼教授
小野　幸子(第 6 回生)

東京医科大学看護専門学校創立 50 周年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。また、今回、このようなおめでたい記念誌に、執筆の機会を賜り、大変恐縮するとともに感謝致しております。

さて、上記テーマを頂きましたが、東京医科大学看護専門学校は、私にとって、看護基礎教育を受けた場でもあります。そして昭和 47 年 3 月卒業後、4 年間の附属病院での臨床経験後、そろそろ田舎に帰って結婚でも･･･と考えていた矢先、当時、教務主任であられた亀川先生からのお誘いに、その意味も十分吟味せぬまま専任教員として勤めさせて頂きました。また、振り返ってみますと、総計 7 年間の看護実践経験の全てが当大学附属病院です。つまり、東京医科大学は、看護学生として、看護師として、また看護(学)教員としての私の出発点といえます。また、看護専門学校での教員経験は、当時 26 歳の若いだけが取り柄の未熟な私には、大変刺激的であるとともに、その重責に押しつぶされそうだったことを思い出します。とりわけ 13 回生の皆様の副担任として、様々な課題に必ずしも的確な対応ができなったにも関わらず、全国でのご活躍や附属病院の看護管理職として貢献されていることを見聞するにつけ、感動するとともに心より敬意を表しております。また、1 年間の専任教員の経験でしたが、これが看護(学)、看護(学)教育および教員としてのあり方を追究する契機になり、現在まで続いているといえます。

当時の看護の教育課程は専門学校が中心でしたが、その後、高等教育(大学)化が急速に進み、当時、10 校もなかった看護系大学が現在では 210 校に激増し、かつ、高度看護実践家や看護(学)教育者および看護学研究者の養成も急速に進み、修士課程が 144 課程、博士後期課程が71課程になっております。東京医科大学看護専門学校におかれましても、かねてからの念願だった大学化が平成 25 年 4 月に実現し、開設できたことは、感概深く、心より発展を祈念しております。

高度・先進医療の進展とともに世界に類をみない速度で進行する超高齢社会および多死社会への対応、東日本大震災による復興推進などは我が国の喫緊の課題といえます。こうした背景の中、看護職は専門職として、これらにどう応えていけるかが問われていると思います。創設 50 年を迎え、多くの東京医大看護専門学校の卒業生お一人おひとりが、真の意味で看護専門職として役割を果たすために、これまでのキャリヤを基盤に、今後どのようにキャリアデザインし、取り組んでいくかが課題といえましょう。現状に甘えることなく、自己実現に向かって歩んでいかれますことを心より願っています。

21年間の感謝をこめて

島根大学医学部看護学科
元専任教員 長田京子

私が看護教員養成課程を卒業したのは２０代半ばで、教員としてのはじめての就職先が、自宅から比較的近かった東京医科大学看護専門学校でした。当時の校舎や附属病院は西新宿の高層ビル街の中にあってひときわ古い建物で、とても驚いたことを覚えています。その後、病院は18階の高層ビルとなり、私は17階や18階の病棟から患者さんや学生さんと富士山や新宿の街を眺めながら実習しました。また、地域看護学実習では、学生さんと一緒に副都心の裏道の風景を楽しみながら訪問看護先のご家庭を訪ね、看護は本当に生活にあるのだなあと実感しました。

東京医大の皆様には、21年間にわたってお世話になりました。21年という時間はとても長く、赤ん坊が大人になるまでの年月です。教員生活の中には楽しいことも苦しいこともありましたが、今一番思うことは、私は自分の周りにいて下さった先生方や学生の皆様、そして卒業生を含む附属病院の皆様に大きく育てていただいたということです。学生さんが受持ち患者さんの看護にむかう純粋さに感動し、そして、先生方からは、看護や教育の本質を探究するために試行錯誤することの大切さを学びました。特に、看護教育に研究的に取り組むことのできる環境を提供していただいたことに感謝しています。

現在は出身地にある大学で教員を続けていますが、看護や教育の本質レベルを探究する基盤は、東京医大の看護専門学校で培われたと言っても過言でないと思っています。

このたびいよいよ大学になると伺いました。長い歴史のなかで、多くの卒業生が看護師として人々の健康生活に貢献してこられたと思います。今後とも東京医大の皆様のますますのご活躍とご健康を祈念いたします。

左から 内海(三輪)・渡部・長田・吉岡先生
トランプ

なつかしいお顔が浮かびます

元専任教員
女子栄養大学・大学院 教授
野中 靜

開校 50 周年おめでとうございます。

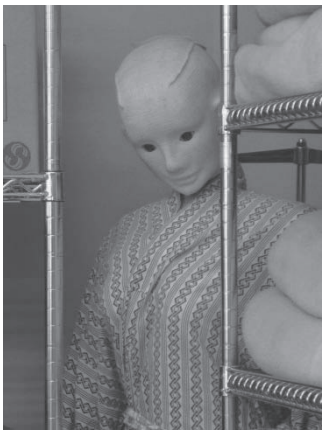
私は昭和 56 年に専任教員として着任し、平成5年までの11年半にわたり大変お世話になりました。着任2年目の昭和 58 年には開校 20 周年の記念式典が行なわれましたが、当時の式典の様子は今も記憶に残っております。

東京医科大学看護専門学校は、私にとりまして看護教師として第一歩を踏み出した場所であり、記念すべき学校です。新米教師として未熟な私であったにもかかわらず、学生の皆様も教職員の方々も、温かく誠実にお付き合いしてくださいました。なかでも着任早々に実習指導を担当した17回生、最初に担任を務めた 19 回生、次に担任した22回生は、特に印象に残っております。真面目で熱心である一方、あまり型にはまることを好まない個性的な学生が多かったように思います。当時学生だった面々の大半は、今でいうアラフォー(around40)と呼ばれる世代に属します。男女雇用機会均等法のもとで仕事をし、キャリアを積み、結婚と仕事の選択がそれまでの世代より自由に行えるようになった世代です。また、医療の高度化と人口の高齢化の急速な進展に伴い、看護現場に押し寄せた需要の変化に直面してきた世代でもあります。今どこでどのような人生を歩んでいるのでしょうか。なつかしいお顔が浮かびます。

さて、開校 50 周年記念の年に、看護学科の設立という新たな歴史の頁が開かれたとのニュースに接しました。これはまさに同窓生や関係者による看護学校の半世紀におよぶ努力と成果の賜物でありましょう。新しい学科には、東京医科大学看護専門学校で今日まで築かれた伝統を超えて国内外に向かって羽ばたいていかれるよう心からのエールを送ります。

私事になりますが、東京医科大学を退職後看護短大から看護大学の教員を経て、教師生活も早や 30 年を過ぎました。4年前に看護系の大学を辞して、女子栄養大学にて養護教諭と管理栄養士の養成課程で看護学の教育と研究指導を担当し現在に至っております。看護学の本流を離れてみて、従来とは異なる角度から看護の面白さと価値を再発見する日々です。

最後に、同窓生と在校生の皆様が看護を通して社会に貢献できることに誇りを持ち、職業人生を通じて「自主自学」の精神を貫いて益々専門性を高めていかれることを願ってやみません。



野中先生に似ていると言われた
包帯巻き練習人形

東京医科大学看護専門学校の教育とその思い出

元専任教員
内海(三輪) 壽子

東京医科大学看護専門学校が 50 周年を迎えられること、大変喜ばしく、お祝い申しあげます。

このたび、縁があって共に 50 周年をお祝いできることをうれしく思います。私は現在、某看護学校で教務助手として実習指導の仕事に携わっています。そこで、東京医科大学看護専門学校紀要第 23 巻第 1 号を手にすることができ、山科先生の巻頭言「受け継がれる飛躍のための証」を読み、教員の皆さまの努力が伝わってきて、石塚先生にお電話した次第です。

私は 1978～1984 年の 6 年間、専任教員として 3 年生の担任を 3 年間、臨床指導教員として 3 年間、在籍しました。当時、看護研修学校を卒業し、気負いと生意気な感じのある私を職員の皆さまは温かく迎えてくださったおかげで、未熟ながらも頑張って看護教育に携われたのだと思います。振り返って思い出すことは、やはり、学生ひとり一人との出会いであり、その皆さまとの出会いが私を成長させてくれたのだと思います。学生との面接では真摯に向き合い、行事、特に修学旅行では楽しかった思い出がうかびます。実習担当では精神看護学の担当でしたが、その時の私は学生から「米搗きバッタ」と言われていました。今では懐かしい思い出です。東京医科大学の建学の精神－自主自学、倫理観に基づく豊かな人間形成をめざす教育理念のもと、東京医科大学看護専門学校で皆さまと共に学べたことをうれしく思います。

今も続いている教員研修の継続と積み重ねに‘継続は力なり’を感じます。日頃の仕事や研究、業績が紀要としてまとめられている努力に対し、私は共に仕事ができた一人として誇りに思います。

私事ですが、東京医科大学看護専門学校退職後、子育て、介護をしながら、訪問看護の仕事に就き、在宅の分野から日本看護協会の緩和ケア認定看護師の資格をとりました。今後は自らの看護が実践できるようにさらに頑張っていきたいと思っています。

4 月から東京医科大学看護学科が開学し、看護専門学校は 2016 年に 52 年という長い歴史を閉じることとなります。多くの力が必要になるかと思いますが、教職員の皆さまが一丸となって、有終の美で幕が閉じられますように・・・。

今後のますますのご発展を祈念しております。

左から内海(三輪)・吉岡・長田・渡部先生

思い出深い８年間

元事務
東京医科大学病院 看護部事務
加藤(小川) 道子

この度は、東京医科大学看護専門学校５０周年記念誌原稿執筆のお声を掛けていただきありがとうございます。

私が過ごした青春（20代）の８年間(昭和44年２月～昭和52年３月在職)を思い出しながらお話をさせていただきます。

昭和４４年２月、後世に語り継がれる「花の３回生」の卒業期に就職し、折りしも世の中は学生運動が盛んな時代で活気がありました。校長先生は与謝野鉄幹、与謝野晶子のご長男与謝野光先生、長身で面長、お母様似の優しい方でした。本科在職中に校長与謝野光先生～高橋雅俊先生に、教務主任上杉栄子先生～亀川すよ先生にと交代がありました。お酒が入った時の高橋先生からは軍医としての戦地のお話、亀川先生からは、従軍看護婦時代南方で過ごされたお話をしていだいた事、専任教員のお一人お一人の懐かしいお顔を、又地下階段教室やひんやりした実習室等々当時の事が鮮明に蘇ってきます。学校と寮が同じ建物にあり、小柄な寮母の高尾さんや真面目な古賀寮母さんの下、寮生は先輩・後輩同室で礼儀作法も厳しく、規則正しい寮生活を送っていたように思います。教員、寮母、事務が一緒に過ごす穏やかな時の流れがありました。

１年後の昭和４５年に昼間２年制別科新設。昭和４９年９月進学科新設に向け、杉浦亮子教務主任、黒坂知子専任教員、私（加藤）の３人でスタートしました。個性的な学生が多く、１回生は特に印象深いものがあります。

子育て後、平成５年から病院看護部で再就職の機会をいただき今年８月定年退職致します。当時学生だった皆さんが、看護専門学校や東京医科大学病院の要職に就かれ、働いている姿を見ると嬉しく又誇らしく思います。

東京医科大学看護専門学校で学ばれた同窓生の皆様、これからもますますのご活躍お願い致します。

5～6回生が参加した東医祭の運動会にて:左端が加藤さん
(昭和45年11月)

私にとっても特別な学校

元事務・図書室(司書)
学校法人東京医科大学 総務部総務課
塩田 純子

東京医科大学看護専門学校 50 周年、誠におめでとうございます。

昭和 54 年 6 月～平成 18 年 3 月までという長い期間を過ごさせていただきました。思い返せば就職して一週間後に「貴女、一生いるでしょう!?」と、先輩に言われた言葉が本当になってしまいました。でもそれは、教職員の皆様方の温かいサポートと、学生さんの看護を学びたいという真っすぐな目と真摯な態度に感銘を受け続けたからに他ならないと感謝をしています。

しばらくして図書室の担当を兼務しましたが、当時は図書室とは名ばかりで閲覧机も少なく、快適とは言えない場所でした。しかし、新カリキュラム改編で誕生した「情報科学」では、インフォメーションリテラシーの視点を組み込んでいただけ、この頃から図書室を利用する学習が活発になっていきました。学生さんとの演習授業はとても楽しい思い出となっています。卒業後も良く勉強や研究をしに来てくれて誇らしく思いました。

図書と並行して、事務の仕事では入試から学籍、卒業までを管理するシステムを組み、平成元年の入学試験から使用しました。受験生が書いた出願シートを OMR で読み込む方法は、千人を超える受験生がいた当時は救世主のようでした。

看護専門学校は、卒業生の方々が抱く思いと同様に私にとっても特別で、大切な場所です。大学病院や看護専門学校、看護学科でもご活躍されている卒業生を見かけると、とても嬉しく思います。東京医科大学看護専門学校の同窓の皆様、益々のご活躍を期待しております。

左から 塩田さん、樋口(三嶋)先生、池本先生
謝恩会にて

忘れられない思い出

元事務 井上 真由美

東京医科大学看護専門学校創立 50 周年おめでとうございます。

私は、看護進学科の事務職員として昭和 52 年 3 月に就職し、昭和 61 年 8 月に当校の廃校を機に退職しました。

最初は戸惑うことばかりでした。建物が迷路のように繋がっているので、講師の研究室が分からず迷子になってしまったり、研究室と間違えて霊安室の扉を開けてしまった時は最悪な思いでした。講義に使うからと、消毒薬の臭いのする研究室から臓器を台車に乗せ、地下の教室まで運んだこともありました。4 月に入りすぐ、1 回生の卒業試験の準備にかかりましたが、これが私の最大の試練でした。文書関連はタイプで作成しましたが、試験問題の清書はガリ版刷でした。初めて使うガリ版、鉄筆で文字を書くものですが、何回書き直してもまともな字が書けず、学生からのクレームが殺到。申し訳ないやら情けないやら大変な思いでした。仕事に活かせればとタイプやペン習字を習得したにもかかわらず、ガリ版に太刀打ち出来ませんでした。その後かなり手こずったことは言うまでもありませんが。初めて目にした戴帽式はとても感動しました。式は厳粛に執り行われ、学生達の感激と希望に満ちた顔はとっても輝いていました。「立派な看護婦さんになって下さいネ」と祈ったことを覚えています。退職後に卒業生達が立派に活躍している様子を伺うと、当時の頑張っていた姿を思い出し、とても嬉しく思いました。

これからも看護専門学校の益々のご発展をお祈り致します。

情報科学を担当して

昭和大学歯科医学教育推進室
情報科学担当講師 和田 佳代子

1997 年度から「情報科学」を担当させて頂き、はや 15 年になりました。お伺い当初はまだインターネットどころか、パソコンも今のように普及していない時代でした。

当時の学生さん達は高校までパソコンに触れたことがない方が多く、マウスの操作どころかパソコンを立ち上げる方法も初めての方が多かったことを思いだします。

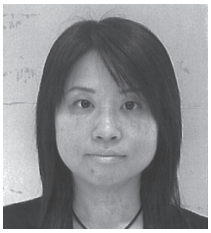
図書や雑誌論文の検索も、手書きのカードを配って実際に図書館で図書を探して頂いたり、また雑誌論文も冊子体の『最新看護索引』などを使って、二人一組で文献番号を照らし合わせながら検索していた時代でした。

現在ではインターネットが普及し、パソコンのスキルは高校で既に充分に習得した学生さんが入学してくる時代となりました。それに伴い、授業内容は図書も雑誌論文もパソコンを介して検索し、特にインターネット上に溢れる医療情報の信頼性を評価して看護に活用する方法が授業の中心になってきました。授業の最後にパワーポイントを使って研究発表をしてもらっていますが、その完成度の高さに驚かされています。

「情報科学」は演習が中心の授業のせいか、教員に対して近い距離感を持ってくださり、どの年度の学生さんもみなさん、熱心に看護・医療情報を検索してくれた姿が今でも目に浮かびます。学生のみなさま全員に謝意を表したいと思います。

皆さん、お元気ですか？

英語Ⅱ担当講師　高井千草



皆さん、お元気ですか？そして。。。その後、英語を使う機会はありましたか？

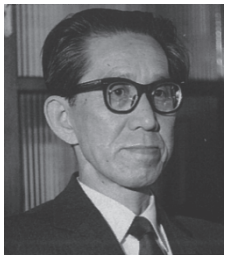
まさに世紀の変わり目である 1999 年の 10 月、当時まだ大学院生だった私は、初めて東医で皆さんの英語を担当することになりました。あれから 14 年、一緒に英語を勉強するのが楽しくて、居心地が良くて、いつも明るく接してくれる皆さんが大好きで、今もまだここで教えています。そして、この度 50 周年も一緒に迎えることができました。

最後の授業では、授業の感想を書いてもらいました。中には英語が好きで海外にもよく行く人がいたりしましたが、圧倒的多数の人は中学・高校からの英語アレルギーが蓄積したままでした。それなのに皆さんは積極的に発言し、丁寧にノートをまとめ、大きな声で英語の歌を歌っていましたね。本当によくがんばってくれました。

これからも英語使って下さいね。英語はコミュニケーション手段です。英語を話せたら、世界中にお友達ができ、活躍できる舞台も「世界」へと広がります。英語は同時に言語でもあります。皆さんが行き詰まって道しるべがほしい時、あるいは一歩踏み出す勇気がほしい時、人間関係に悩み人を信じられなくなった時、古今東西の先人たちが時間と空間を越えて、英語という言葉で皆さんに語りかけて来るでしょう。その言葉を紐解き意味を理解した時、言葉はそっと皆さんの肩を抱き背中を押してくれることでしょう。

Don’t let the sadness of your past
and your fear of the future
ruin your happiness today.
Stay positive because TODAY could be the BEST day of your life!!

懐かしき非常勤講師の先生



哲学　高間直道先生

音楽　松井先生(左端)

病理学　正山先生

英語　大沢銀作先生

老年病学　勝沼英宇先生